

## 優秀賞

### 髪の毛の寄付

秦野市立本町中学校

二年 笠原 由衣

私が「ヘアドネーション」という言葉を知ったのは小学校六年生のときでした。美容室で髪の毛を切ってもらうときに「もう少しで切ればヘアドネーションできるのに。」と美容師さんに言われたことがきっかけでした。そのときは少ししか切らなかつたけれど「ヘアドネーション」という言葉が引つかかり家に帰って調べてみました。

ヘアドネーションとは、がんや不慮の事故などにより髪の毛を失ってしまった子どもたちのために寄付をされた髪の毛でウィックをつくることだそうです。

必要な髪の毛の長さは三十一センチメートル。それを知って、結構バツサリ切ってしまう長さなのだと思います。なかなか三十一センチの長さを切ることに対しての覚悟が決まらず、ただただ月日が経っていきました。

すっかり忘れかけていた私に再度この言葉を思い出させたのは本屋さんでのことでした。髪がつなく物語という本が平積みになされていたのです。タイトルが目に入ってきた瞬間は、はっと息をのむような感じがしました。本を購入し、読み進めると想像していた「ヘアドネーション」の向こう側を突きつけられたようでした。ウィックが必要ということがどうということなのか目を背けたくなる現実がそこにありました。あの時、バツサリ切るのをとどまっていた自分がなんだかすごく恥ずかしいような、うしろめたいような気持ちが湧いてきました。こんなにも多くの人が待ち望み、私の髪が笑顔につながるのならと人生初の「ヘアドネーション」をすることを決意しました。

そして今年の五月、私の髪は腰まで伸びました。美容室を「ヘアドネーション」で予約し、いざハサミを入れるときには少し緊張しました。ザクツザクツとハサミが入られていく中、私は読んだ本を思い出していました。切り終えた束になっている髪を見て髪は不思議と誇らしく見えたのです。

「ヘアドネーション」は誰でもできるボランティアではないかもしれませんが、実際ここまで伸ばすのは大変でした。シャンプーひとつとっても全体を泡立てるまで一苦労だし、乾かすには本当に時間がかかります。冬には静電気でもものすごく広がってしまうのです。もしかすると、男性は女性よりも髪を伸ばすことに抵抗や苦労があるかもしれません。ただ、知ってほしいのです。一つの小児用ウィックを作るのに三十〜五十人分の髪の毛の寄付が必要だそうです。自分が病気だと分かり大変な治療をしていく上で、髪が抜けてしまうその気持ちはずらく悲しく鏡を見ることも嫌になってしまう。それに比べれば私が髪を伸ばす苦労は、苦労の内に入らないかと悲しい気持ちになりました。

私のように、「ヘアドネーション」でカットされた髪の毛は、ヘアドネーション団体の事務所に届けられます。そこで髪の毛の長さやカラーリングの有無などで仕分けされます。その後工場では髪の毛をトリートメント処理し、子どもたちからのウィック製作の申し込みによって医療用ウィックの製作が始まります。その先に子供たちの笑顔があるのだと思います。

私の意思が「ヘアドネーション」という福祉の活動に少しでも役に立っていればいいなと思います。そしてこの活動を一人でも多くの人に知ってもらえたらうれしいです。